

要介護高齢者の在宅介護が家族機能におよぼす影響（第2報） —Feetham 家族機能調査日本語版 I を用いた夫婦間での検討—

前久保恵 岡本絹子 橋本真紀

The effect on family function of home caregivers nursing frail elderly (Part 2) :
Investigation of marital relationships using Japanese Version I of the Feetham Family Functioning Survey

Megumi MAEKUBO, Kinuko OKAMOTO, Maki HASHIMOTO

要 旨

要介護高齢者の在宅介護が同居家族の家族機能に及ぼす影響を明らかにし、同居家族への看護のあり方を検討することを目的とした。要介護高齢者の子と子の配偶者を対象とし、Feetham 家族機能調査日本語版 I（FFFS）を用いて調査し、子の夫婦間および介護の場別（在宅群・施設群）で家族機能の評価について比較した。その結果、在宅群の子の夫婦間において「家族と個人の家族構成員との関係」の分野の家族機能評価に有意な差が見られた。在宅群においては、妻は配偶者との相互関係といった「家族と個々の家族構成員との関係」へのニーズが、夫は知人や身内との相互関係といった「家族とサブシステムとの関係」へのニーズがあり、夫婦間でニーズのズレが生じていると考えられた。夫婦相互の絆を強化できるような専門的介入の必要性が示唆された。

キーワード：要介護高齢者、介護、家族機能、Feetham 家族機能調査日本語版 I

Key words : frail elderly, care, family functions, Japanese Version I of the Feetham Family Functioning Survey

はじめに

わが国では、2000年4月から公的介護保険制度が開始された。しかしながら、提供される介護サービスが不十分であることから、依然として介護の多くを家族が担っている場合は多い。このような背景の中、家族員である要介護高齢者の介護という課題に直面すると、危機対処能力が低い家族は家族危機に至ることもある。そこで、本研究では、夫婦間の家族機能評価を検討することで、要介護高齢者の介護が家族機能におよぼす影響を明らかにし、家族への看護のあり方を検討することを目的とした。

研究方法

1. 対象および方法

A県下において在宅で要介護者を介護している嫁・娘とその配偶者（以下、在宅群妻・夫）とコントロール群として施設入所している要介護高齢者の嫁・娘とその配偶者（以下、施設群妻・夫）を対象とした。本研究で取り扱う要介護高齢者は、要介護認定1～5（2003年時点での要介護認定に準じる）の認定を受けた65歳以上の人と操作的に定義し、対象者抽出は、A県下のケアマネージャーに一任した。

自記式質問紙を使用し、2003年9月から10月の期間、ケアマネージャーに配布の依頼をした。その際、書面にて本研究の主旨を説明し、同意が得られた場合

のみ2003年11月末までに郵送で回答してもらった。質問紙はすべて無記名とし、個人を特定できないよう配慮した。

質問紙の内容は、法橋ら¹⁾の Feetham 家族機能調査日本語版 I（以下、FFFS）の他に、対象者の属性（年齢、配偶者の有無等）と要介護高齢者の属性（年齢、要介護度、介護必要年数等）を追加した。

分析には、統計パッケージ SPSS（Ver.11）を使用し、得点の差の検定には、Mann-Whitney の U 検定を行なった。

2. FFFS の構成と家族機能の評価方法

FFFS は家族エコロジカルモデルを背景とし、《家族と家族員の関係》、《家族とサブシステムとの関係》、《家族と社会との関係》の3分野を網羅した27項目で構成される自記式質問紙調査である。25項目は回答選択肢型になっており、役割行動の履行を問う各質問項目に対して、現実（a 得点）、理想（b 得点）、価値（c 得点）を、それぞれ7段階のリッカート・スケールで評価してもらう。家族機能を評価する d 得

点は、a 得点と b 得点の差の絶対値として算出され、高 d 得点は家族機能の充足度の低下を意味し、臨床的な介入が必要なことが示唆されている。さらに、d 得点から家族機能の充足度の低下が認められ、かつ c 得点から高い価値を示している項目は、家族看護介入の優先度が高いことを意味する。家族機能の分野は3分野に分類され、「家族と家族員の関係」は10項目、「家族とサブシステムとの関係」は8項目、「家族と社会との関係」は6項目の計24項目からなり、さらに6因子で構成されている。本研究においてもこの枠組みを使用した。（図1）

なお本研究では便宜上、家族機能の分野を《》、6因子を<>、各項目を [] で示した。

結 果

1. 質問紙の回収状況

在宅群妻・夫277組と施設群妻・夫94組に質問紙を配布した。在宅群妻154名（回収率55.6%）、在宅群夫115名（回収率41.5%）、施設群妻48名（回収率51.1%）、施設群夫38名（回収率40.4%）の回答を得た。これら

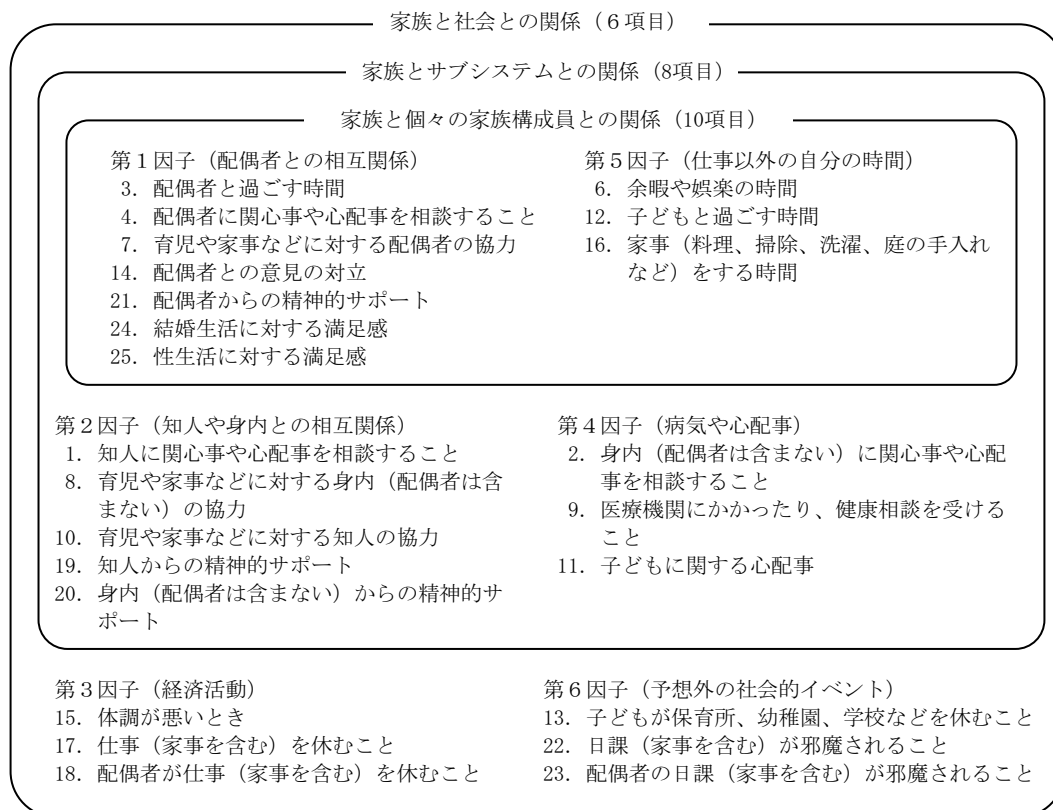


図1 FFFS 日本語版 I の構成

の回答者の中から夫婦共に回答があり、25項目の尺度に記入漏れのないものを選び、在宅群妻・夫63組（有効回答率22.7%）、施設群妻・夫29組（有効回答率30.9%）を分析対象とした。（表1）

2. 分析対象者の属性

分析対象者の平均年齢は、在宅群妻55.79（±8.56）歳、在宅群夫58.96（±7.31）歳、施設群妻56.59（±7.31）歳、施設群夫60.00（±7.90）歳であった。要介護高齢者から見た妻側の続柄は、在宅群は嫁76.2%、娘23.8%、施設は嫁69.0%、娘31.3%であった。要介護高齢者の平均年齢は、在宅群84.81（±8.28）歳、施設群87.21（±6.63）歳で、要介護度は在宅群2.75（±1.45）、施設群3.90（±1.24）であっ

た。両群の間に有意な差はなかった。（表2）

3. 介護の場別にみた夫婦間の家族機能評価の比較

得点が高くなるほど家族機能の充足度が低いことを示すd得点について、在宅群・施設群で夫婦間の評価に注目して検討した。

3分野の家族機能について見てみると、在宅群では《家族と個々の家族構成員との関係》の分野においてのみ夫婦間での評価に有意な差が見られた。施設群においては有意な差は見られなかった。（表3）

次に各因子別に見てみると、在宅群では、第1因子＜配偶者との相互関係＞第5因子＜仕事以外の自分の時間＞において、夫婦間で有意な差が見られたが、施設群では有意な差は見られなかった。（表4）

表1 回収状況及び有効回答数

		配布数	回収数	回収率	抽出有効回答数	抽出/配布
在宅群	妻	277	154	55.6%	63	22.7%
	夫	277	115	41.5%	63	22.7%
施設群	妻	94	48	51.1%	29	30.9%
	夫	94	38	40.4%	29	30.9%

表2 分析対象者の属性

項 目	在 宅 群 (n=63)	施 設 群 (n=29)
妻の平均年齢（歳）	55.79±8.56	56.59±7.31
要介護高齢者からみた分析対象（妻側）の続柄		
嫁（名）	48(76.2%)	20(69.0%)
娘（名）	15(23.8%)	9(31.33%)
夫の平均年齢（歳）	58.98±8.76	60.00±7.90
要介護高齢者の平均年齢（歳）	84.81±8.28	87.21±6.63
要介護度	2.75±1.45	3.90±1.24
介護が必要となった期間（年）	4.76±3.79	4.51±3.48

表3 夫婦間での家族機能別の比較

	個々の家族構成員との関係	サブシステムとの関係	社会との関係
在宅妻（n=63）	12.3±8.1	9.0±6.6	6.6±4.8
在宅夫（n=63）	8.4±6.4 **	8.1±5.9	5.2±4.4
施設妻（n=29）	11.5±7.7	7.8±5.8	7.3±3.6
施設夫（n=29）	8.7±5.6	7.3±5.7	4.9±3.1

**：p<0.01

さらに、25調査項目について、d 得点が高い項目上位10項目それぞれと家族機能の分野別についての関係に注目しながら検討した。

在宅群において、各項目の平均値は表5の通りで、上位10項目について約1～2点であり、夫婦ともに[体の不調]や<仕事以外の時間>の不足があがっていた。それ以外の項目としては、在宅群妻は、[配偶者からの精神的サポート][育児や家事などに対する配偶者の協力][結婚生活に対する満足感]といった<配偶者との相互関係>があがった。また、在宅群妻

の上位10項目中の半数を<家族と個々の家族構成員との関係>が占めていた。また、表5に示すように妻の項目のうち7項目は、同じ項目に対する夫の評価との間に有意な差が見られた。

在宅群夫では、<病気や心配>、<知人や身内との相互関係>があがっており、これら<家族とサブシステムとの関係>が上位10項目の半数を占めていた。また、妻にみられた<配偶者との相互関係>に関する項目はいずれも上位10項目には入っていなかった。

施設群では、表6に示す通り、[体の不調]が夫婦

表4 夫婦間での因子別の比較

	1 因子 配偶者との 相互関係	2 因子 知人や身内 との相互関係	3 因子 経済活動	4 因子 病気や心配事	5 因子 仕事以外の 自分の時間	6 因子 予想外の 社会的イベント
在宅妻	7.3±6.1	5.3±4.8	4.1±2.9	3.7±3.0	5.1±3.3	2.5±2.6
在宅夫	4.7±4.7	4.2±3.8	3.4±3.1	3.9±3.3	3.8±3.1	1.8±2.3
施設妻	7.4±6.3	4.7±4.1	4.2±2.5	3.2±2.7	4.2±2.6	2.1±2.4
施設夫	5.2±4.7	3.6±3.5	3.6±2.4	3.7±3.5	3.5±2.6	1.3±2.0

**：p<0.01 *：p<0.05

表5 d 得点の上位10項目（在宅群）

n=63

順位	分野	因子	在宅群妻	平均点	順位	分野	因子	在宅群夫	平均点
①	個々	5	余暇や娯楽の時間 *	2.2	①	サブ	4	医療機関にかかったり、健康相談を受けること	1.9
②	個々	5	家事(料理,掃除,洗濯,庭の手入れなど)をする時間 **	1.7	②	社会	3	体調が悪いとき	1.6
③	社会	3	体調が悪いとき	1.7	③	個々	5	余暇や娯楽の時間	1.5
④	サブ	2	育児や家事などに対する身内(配偶者は含まない)の協力	1.6	④	個々	5	子どもと過ごす時間	1.3
⑤	サブ	4	医療機関にかかったり、健康相談を受けること	1.6	⑤	サブ	2	育児や家事などに対する身内(配偶者は含まない)の協力	1.1
⑥	社会	3	仕事(家事を含む)を休むこと **	1.5	⑥	サブ	4	子どもに関する心配事	1.1
⑦	個々	1	配偶者からの精神的サポート **	1.5	⑦	個々	5	家事(料理,掃除,洗濯,庭の手入れなど)をする時間	1.0
⑧	社会	6	日課(家事を含む)が邪魔されること *	1.5	⑧	社会	3	配偶者が仕事(家事を含む)を休むこと	1.0
⑨	個々	1	育児や家事などに対する配偶者の協力 **	1.4	⑨	サブ	2	知人に関心事や心配事を相談すること	1.0
⑩	個々	1	結婚生活に対する満足感 *	1.2	⑩	サブ	4	身内(配偶者は含まない)に関心事や心配事の相談をすること	1.0

下線は高重要度得点項目にあげられた項目

**：p<0.01 *：p<0.05

分野別略称 個々：家族と個々の家族構成員との関係 サブ：家族とサブシステムとの関係 社会：家族と社会との関係

表6 d 得点の上位10項目（施設群）

n=29

順位	分野	因子	施設群妻	平均点	順位	分野	因子	施設群夫	平均点
①	社会	3	体調が悪いとき	1.9	①	社会	3	体調が悪いとき	1.9
②	社会	3	余暇や娯楽の時間	1.8	②	—	—	近所の人や同僚と過ごす時間	1.5
③	サブ	4	医療機関にかかったり、健康相談を受けること	1.6	③	個々	5	余暇や娯楽の時間	1.4
④	個々	5	家事(料理,掃除,洗濯,庭の手入れなど)をする時間	1.6	④	サブ	4	子どもに関する心配事	1.3
⑤	個々	1	育児や家事などに対する配偶者の協力 **	1.4	⑤	サブ	4	医療機関にかかったり、健康相談を受けること	1.2
⑥	サブ	2	育児や家事などに対する身内(配偶者は含まない)の協力	1.4	⑥	サブ	4	身内(配偶者は含まない)に関心事や心配事の相談をすること	1.2
⑦	社会	3	仕事(家事を含む)を休むこと *	1.4	⑦	個々	5	家事(料理,掃除,洗濯,庭の手入れなど)をする時間	1.2
⑧	個々	1	配偶者と過ごす時間	1.3	⑧	個々	1	配偶者と過ごす時間	1.1
⑨	個々	1	結婚生活に対する満足感	1.2	⑨	個々	1	結婚生活に対する満足感	1.0
⑩	社会	6	日課(家事を含む)が邪魔されること *	1.2	⑩	個々	1	配偶者との意見の対立	1.0

下線は高重要度得点項目にあげられた項目

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

分野別略称 個々：家族と個々の家族構成員との関係 サブ：家族とサブシステムとの関係 社会：家族と社会との関係

共に最も不充足項目としてあがっており、また、＜仕事以外の自分の時間＞の不足が夫婦共にあがっていた。また、在宅群ではあがっていなかった、[配偶者と過ごす時間]が夫婦共にあがっており、＜配偶者との相互関係＞に関する項目が夫婦共にあがっているのが特徴であった。また、《家族と個々の家族構成員との関係》が夫婦共に上位10項目の半数を占めていた。しかしながら、[育児や家事などに対する配偶者の協力][仕事(家事を含む)を休むこと][日課(家事を含む)が邪魔されること]の項目については、妻と夫の評価に有意な差が見られた。

4. 介護の場別にみた夫婦間の重要度得点の比較

得点が高くなるほどその項目を重要と考えていることを示すc得点について、在宅群・施設群で夫婦間の評価に注目して検討した。表7・8にc得点が4.5以上の項目を示した。

在宅群妻の重要項目は、《家族と個々の家族構成員との関係》が多く、しかも＜配偶者との相互関係＞が多くあがった。一方、在宅群夫は《家族とサブシステ

ムとの関係》の項目についても重要項目としてあがっていた。

施設群妻の重要項目は、在宅群妻であがった《家族と個々の家族構成員との関係》の項目のみならず《家族とサブシステムとの関係》の項目についてもあがっていた。一方、施設群夫は在宅群夫と同様の結果であった。

次に項目別の特徴として、[家事(料理,洗濯,庭の手入れなど)をする時間]について在宅群・施設群の妻がともに重要項目としてあがっているのに対して、両群の夫は重要項目としてあがっていなかった。また、[育児や家事などに対する身内(配偶者を含まない)の協力]の項目は、在宅群夫、施設群妻・夫が重要項目としてあげているが、在宅群妻は、この項目が重要項目としてあがっていなかった。

上述したc得点とd得点が高くなる項目・分野は、重要と考えていながら家族機能の充足度が低いことを意味しており、家族看護介入が必要であることを意味する。表5・6において、高c得点にあげられていた項目を下線引きで示した。在宅群、施設群ともに妻

表7 在宅群における高重要度得点（c 得点 ≥ 4.5 ）の項目

n=63

順位	分野	因子	在宅群妻	平均点	順位	分野	因子	在宅群夫	平均点
①	個々	1	配偶者と過ごす時間	5.6	①	個々	1	結婚生活に対する満足感	5.5
②	個々	5	家事(料理,掃除,洗濯,庭の手入れなど)をする時間 **	5.6	②	個々	1	配偶者と過ごす時間	5.3
③	個々	1	配偶者からの精神的サポート *	5.5	③	個々	1	育児や家事などに対する配偶者の協力	5.2
④	個々	1	配偶者に関心事や心配事を相談すること	5.3	④	サブ	4	医療機関にかかったり、健康相談を受けること	5.0
⑤	個々	1	結婚生活に対する満足感	5.2	⑤	個々	5	余暇や娯楽の時間	5.0
⑥	個々	5	余暇や娯楽の時間	5.1	⑥	社会	3	体調が悪いとき	5.0
⑦	社会	3	体調が悪いとき	5.1	⑦	個々	1	配偶者に関心事や心配事を相談すること	4.9
⑧	サブ	4	医療機関にかかったり、健康相談を受けること	4.9	⑧	個々	1	配偶者からの精神的サポート	4.9
⑨	個々	1	育児や家事などに対する配偶者の協力 *	4.7	⑨	サブ	2	育児や家事などに対する身内(配偶者は含まない)の協力	4.6

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

分野別略称 個々：家族と個々の家族構成員との関係 サブ：家族とサブシステムとの関係 社会：家族と社会との関係

表8 施設群における高重要度得点（c 得点 ≥ 4.5 ）の項目

n=29

順位	分野	因子	施設群妻	平均点	順位	分野	因子	施設群夫	平均点
①	個々	5	家事(料理,掃除,洗濯,庭の手入れなど)をする時間 **	5.7	①	個々	1	結婚生活に対する満足感	5.9
②	個々	1	配偶者からの精神的サポート	5.5	②	個々	1	配偶者と過ごす時間	5.8
③	個々	1	結婚生活に対する満足感	5.5	③	社会	3	体調が悪いとき	5.7
④	個々	1	配偶者と過ごす時間	5.5	④	個々	1	配偶者からの精神的サポート	5.7
⑤	社会	3	体調が悪いとき	5.5	⑤	個々	1	育児や家事などに対する配偶者の協力	5.2
⑥	個々	1	配偶者に関心事や心配事を相談すること	5.3	⑥	個々	1	配偶者に関心事や心配事を相談すること	5.2
⑦	個々	5	余暇や娯楽の時間	5.3	⑦	個々	5	余暇や娯楽の時間	5.2
⑧	個々	1	育児や家事などに対する配偶者の協力	4.9	⑧	サブ	4	医療機関にかかったり、健康相談を受けること	4.9
⑨	サブ	4	医療機関にかかったり、健康相談を受けること	4.9	⑨	社会	3	仕事(家事を含む)を休むこと	4.8
⑩	サブ	2	育児や家事などに対する身内(配偶者は含まない)の協力	4.8	⑩	サブ	2	育児や家事などに対する身内(配偶者は含まない)の協力	4.7
⑪	社会	3	仕事(家事を含む)を休むこと	4.7					
⑫	サブ	4	身内(配偶者を含まない)に関心事や心配事の相談をすること	4.7					
⑬	サブ	2	身内(配偶者を含まない)からの精神的サポート *	4.7					

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

分野別略称 個々：家族と個々の家族構成員との関係 サブ：家族とサブシステムとの関係 社会：家族と社会との関係

あげていた項目は、c得点d得点ともに高い項目であった。

考 察

在宅群の妻・夫が上げた、不充足の上位10項目の結果をもとに、在宅での家族の状況を描いてみると、対象の年齢からも考えられる、体の不調を共に感じながら、自分の時間が取れない中、妻は夫との相互関係についてのニーズを持っているが、夫は知人や身内との相互関係や心配事といったサブシステムとの関係にニーズをもっており、“互いのニーズのすれ違い”といった家族の状況が推測できた。(図2)

法橋²⁾は、家族看護学では家族を対象としているにもかかわらず、質問紙の回答者は家族員個人が単位となり、回答者は妻(母親)であることが多く、「妻たちの家族看護学」問題として提起している。また中野³⁾は家族のニーズを把握する視点として、家族を家族員、二者関係、家族システムという3つのレベルから捉え、各々の視点からニーズを把握していくことの重要性を指摘している。本研究において、夫婦間の家族機能評価を比較することで、“互いのニーズのすれ違い”という状況が推測されたが、これは家族のニーズを二者関係のレベルの視点で捉えることで可能になったと考えられた。

北⁴⁾は、在宅ケア提供に対する否定的情緒反応に関わる本質的な問題が、在宅介護による客観的な生活変化や生活崩壊そのものよりも、むしろそこから家族内

に生じるニーズの競合にあることを示し、要介護高齢者家族の在宅介護プロセスを、＜家族内ニーズの競合状態＞を中核カテゴリーとする《在宅介護のしわ寄せによる家族内ニーズの競合プロセス》として明確化している。本研究における“互いのニーズのすれ違い”という状況は、この＜家族内ニーズの競合状態＞と同様の結果であると考えられた。

在宅介護をしている家族への看護のあり方として在宅介護に関わる援助職者は、単に各家族員のニーズ充足だけにとらわれるのではなく、夫婦間にこの“互いのニーズのすれ違い”があることを捉えること、また、夫婦がこの状況を認識でき、夫婦相互の絆を強化し、夫婦自らがニーズの調整を図れるよう援助する必要性が示唆された。

今後の課題

本研究は、夫婦間の比較をするため夫婦両者の回答があるものを分析対象としたため対象数が少なく、今後は対象数を多くしてさらなる検討をしていきたい。

謝 辞

本研究は平成15年度保健科学部共同研究費の助成を受けたものであり、ここに深甚なる敬意を表する。

Abstract

The objectives of the present study were to elucidate the effects of home caregivers nursing frail eld-

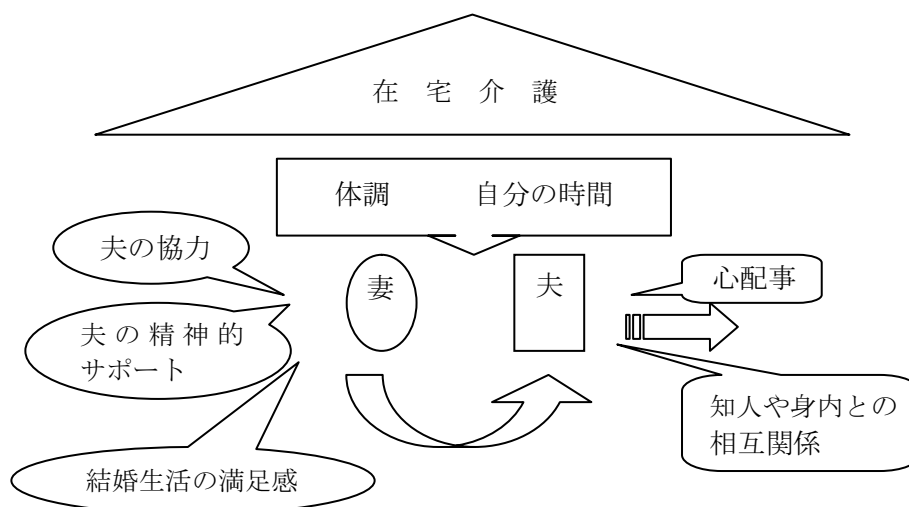


図2 在宅群妻・夫のニーズのすれ違い

erly on the family function of family members living together and to investigate nursing methods for family members. A survey was conducted with caregiving children of frail elderly and the children's spouses, using Japanese Version I of the Feetham Family Functioning Survey (FFFS). Family function was evaluated for the children and their spouses, and for each type of care (homecare and facility care) for comparison. Significant differences in family function scores in the area of "relationship between family and individual" were observed between husbands and wives among children in the homecare group. In the homecare group, the needs of wives were identified as the "relationship between family and individual", or their interrelationship with their spouses, while the needs of husbands were identified as the "relationship between family and subsystem", or their interrelationships with acquaintances and relatives. In view of the differences

observed between the needs of husbands and wives, specialist intervention may be necessary for strengthening marital relationships.

引用文献

- 1) 法橋尚宏、前田美穂、杉下知子 (2000) FFFS (Feetham 家族機能調査) 日本語版 I の開発とその有用性の検討. 家族看護学研究 6(1): 2-10
- 2) 法橋尚弘 (2005) 家族エコロジカルモデルにもとづいた家族機能態度の量的研究-FFFS 日本語版 I による家族機能研究の現状と課題-. 家族看護学研究 10(3): 105-107
- 3) 中野綾美 (2005) 家族の病気体験の理解. 家族エンパワーメントをもたらす看護実践 中野綾美編集 野嶋佐由美監修 ヘルス出版 東京: 30
- 4) 北素子 (2002) 要介護高齢者家族の在宅介護プロセス: 在宅介護のしわ寄せによる家族内ニーズの競合. 日本看護科学会誌 22(4): 33-43